

学校自己評価書			2024年度		奈良学園幼稚園			
大項目	中項目	小項目	具体的評価項目及び指標	取組と成果	評価	評価の観点・理由	課題及び改善方策	
Ⅰ 教 育 活 動 に 関 す る も の	(１) 教育目標・教育計画	① 教育目標の設定	①②幼稚園教育要領実施の趣旨と内容を理解した上で「建学の精神」を具現化するための教育課程を作成し、実践を重ねる。 ③幼稚園から高校までの発達や学びの連続性を見据えながら、その基礎となる幼稚園教育課程の実践と検証を行う。 ②④指導計画の改善を図るために、指導の過程についての反省や評価を行い改善に生かす。	・教育要領や「建学の精神」を踏まえ、現状及び将来を見据えた教育課程を作成し、実践と検証に努めた。 ・毎月末にその月の指導の反省と翌月の指導計画の検討について、職員間で協議する時間を確保することで、発達段階に応じた指導の工夫が行えた。	A	B	・指導計画については、月の保育の反省と翌月の指導計画について協議し合うことで、教員相互が発達段階を理解しながら保育を進めることができた。 ・日々の保育に対する評価を指導案に確実に記録し、週明けに提出して報告・確認することで、振り返りを継続的に行うことができた。 ・主体的・対話的で深い学びとするための保育を目指し、教育活動に採り入れる研修を進めてきた。	・「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を念頭において子どもたちの育ちの方向性を確認し、教育課程や指導計画の見直しに結び付ける実践を重ねていく。 ・教育要領から子どもたちの遊びを読み取り、一人一人の育ちや課題、次に必要な経験を促すための環境構成や援助について捉え、遊びを通してどう育てていくかを計画できるようにしていく。
		② 教育計画の作成			A			
		③ 教育課程の編成			B			
		④ 教育活動の評価			B			
	(２) 保育指導	① 保育指導計画の立案	①②小学校以降の教育の生活や学習の基盤につながることを意識した幼稚園3年間の指導計画を作成し、実践を進める。 ③幼児の体力・運動能力の現状を把握し、体育の先生や外部専門コーチの指導も得ながら運動能力向上に向け取り組む。 ③外国語活動を充実する。(工夫と改善) ④“幼児期の終わりまでに育ってほしい力”について実践と検証を行う。	・豊富な体験を通した学びの基礎や非認知能力を育てることが小学校の教科の基礎につながることを共通理解しながら短期・長期の指導計画を作成した。 ・ ・全園児が毎週1回、園庭等で体を動かすうきうきタイムや、中高の体育教師・外部コーチによるスポーツ教室・水泳教室等を計画的に実施した。その結果、体を動かすことが好きな子が増えた。 ・ALTによる英語では、事前に打ち合わせを行い、内容の工夫をした。歌やゲームなど楽しんで参加出来た。	A	A	・主体的な遊びや生活を通して、好奇心や意欲・粘り強さ・協調性など非認知能力を育てるための環境構成や援助を工夫することができた。 ・保護者アンケートにおいて、「お子様は幼稚園生活を楽しいと感じている」の項目で1 0 0 %に近い肯定的評価を得た。 ・外部コーチによる指導は、楽しく運動に参加しながら体力の向上に繋がった。 ・A L Tによる英語の時間は、楽しい遊びやゲームを主に取り上げたことで年少の子どもたちも喜んで参加することができた。	・小学校教員と連携しながら、小学校低学年の教育内容を知り、育てたい力を明確にしていく。 ・運動能力向上に向けての取組は、次年度も計画的に実施していく。また、親子触れ合い活動も取り入れ体を動かして遊ぶことの大切さを啓発していく。 ・食育は、生きる力の基礎となることも踏まえ、栽培活動にも力を入れ、将来の力の援助とする。
		② 学習内容の精選			A			
		③ 指導方法の工夫改善			B			
		④ 評価			A			
	(３) 道徳・特別活動	① 指導計画の立案	①②計画に基づいた活動を通して、社会情動的スキルや非認知能力、粘り強く最後まであきらめない心を育て、学習に向かう力の育成を目指す。 ③内容の工夫・改善を行い、魅力ある園行事を創造する。	・運動会やマーチング・きらきら発表会等の行事を通して、学齢の成長発達を踏まえた教育効果の検証を進めることができた。また、行事を通じて身近な友達や年上の子供をモデルと出来るような活動の機会を、多く持つことが出来た。 ・日々の保育活動や行事への取組を通して、自尊感情・学びに向かう力・規範意識の醸成について実践を深めることが出来た。	A	A	・各行事が、学齢の発達を段階的に踏まえた企画となるよう工夫することで、園児も保護者も満足感が得られるものとなった。 ・保護者アンケートにおいて、「園行事は、子どもたちの生活を楽しく豊かにするものとなっている」の項目でほぼ1 0 0 %の肯定的評価を得た。	・園行事については、子どもにとって意味ある体験となるよう内容の精選と工夫をしていく。 ・合同運動会などに加えて、園独自で行う行事や校種で行われている行事についても、異校種の児童生徒と積極的に交流する機会がもてるよう工夫する。
		② 学級活動・学級経営			A			
		③ 園行事			A			
		④ 児童・生徒会活動の活性化			B			
	(４) 総合的な学習の時間の指導	① 学習指導計画の立案	①③遊びの充実を図る。(時間の確保と学びを育む環境構成と援助の工夫)	・主体的な遊びの時間の保障に努め、遊びの中の学びを生み出すための環境構成と援助の在り方について、日々の保育の振り返りや保育研究を通して学び合った。保育の中で工夫しようとする姿につながった。 ・異学齢や異校種の交流を重ねることで、遊びの内容に広がりや深まりが生まれた。	A	A	・主体的な遊びや生活を通して、好奇心や意欲・粘り強さ・協調性など非認知能力を育てるための環境構成や援助の工夫に努めることができた。 ・保護者アンケートにおいて、「子どもたちの意欲や主体性を育む保育活動を行っている」の項目でほぼ1 0 0 %の肯定的評価を得た。	・21世紀型スキルを育むためには遊びが重要であることを教員間で再確認し、遊びが継続発展できるよう時間と場を位置付けていく。 ・記録や保育カンファレンスを通して日々の保育の振り返りを大切にし、育ちを促す環境構成や援助について実践できるようにしていく。
		② 学習内容の精選			B			
		③ 指導方法の工夫改善			A			
		④ 評価			A			
	(５) 人権教育	① 人権教育指導計画の立案	①③互いを認め合い、一人ひとりが輝く保育の構築に努める。	・日頃の園生活や勤労感謝ウィークの取組等を通して、これまでの自分の生活や成長を支えてくれた人の存在に気付かせ、感謝するとともに、その思いを伝えるために自分たちができることを考える機会を持つことができた。 ・生命の大切さを教えるという観点から、植物や昆虫などの観察を通して、全ての生き物を大切に思う気持ちを育むことができた。	A	A	・勤労感謝ウィークの取組では、日頃自分たちを見守り支えてくださっている存在に目を向け、感謝の気持ちを直接伝えることができた。 ・大学との共同研究事業を通して、花苗植えや外部講師を招いての親子自然観察体験等を実施し、生命の大切さを学ぶ機会を得ることができた。	・地域や保護者、大学との共同研究事業の協力も得ながら、人権教育につながる体験を企画する。 ・勤労感謝ウィークなど、感謝の気持ちを伝える取組を、継続的に推進する。
		② 保育・学習内容の精選			A			
		③ 指導方法の工夫改善			B			
	(６) 生徒指導	① 組織的な生徒指導	①②③④⑤⑥園内体制の確立（園内での取り組み、情報共有状況、教育相談体制の活用状況） ④家庭への啓発・連携 ⑥遊びや生活の中でのトラブルに対する教師の適切な関わりと保護者との情報共有	・自分自身の有能感を育てることで自尊感情を持ち、相手の気持ちを大切に考えながら行動できるよう、支援することができた。 ・自然と触れ合う機会や小動物や植物の世話を通して命の大切さに気付いたり、異学齢との交流や連携行事を通して、優しさや思いやりの気持ちを育むようにすることを指導計画の中に位置づけ実践した。 ・トラブルが起こった時は、担任一人が抱え込むことのないよう情報共有を図りながら、当事者双方の思いを開き、仲立ちとなってより良い解決ができるように努めた。	B	B	・異学齢交流活動を通して年長者から優しさや思いやりの気持ちを受けた経験から、園内でも自分より小さい子に優しく接する姿がみられた。 ・保護者アンケートにおいて、「幼稚園は、生活指導が身につくよう指導している」の項目で9 3 %の肯定的評価を得た。 ・トラブルに対しては教員間で共通理解を図り、組織として子ども・保護者と丁寧に寄り添うことに努めた。 ・保護者との密な連携によって、いじめの芽を見逃さず一人一人の自尊感情を大切に育んできた。	・発達段階に応じて、人と関わる経験や動植物との触れ合いを計画的に取り入れていく。 ・自分のやりたいことを実現するために、粘り強く取り組む体験と、自分の気持ちを整理し、折り合いをつけながら前に進む体験が重ねられるよう、保育環境を整える。 ・園全体の問題として小さいじめの芽も見逃さず、教師間で情報共有し組織として問題の解決にあたる。 ・今後も小学校や関係諸機関との連携を図りながら、より良い園児理解と支援に努める。
		② 問題行動の指導			B			
		③ 教育相談・幼児理解			A			
		④ 家庭との連携			A			
		⑤ 関係諸機関との連携			B			
		⑥ いじめの問題への取組			A			
	(７) 進路指導	① 組織的な進路指導	①小学校との連携を深め、適切な情報共有と滑らかな接続を目指す。 ③幼・小内部進学委員会を充実し、幼・小の教員が連携し、内部進学にふさわしい園児の力を見極め、育てていく。	・幼・小内部進学委員会は、幼小双方の教員が観察・記録・協議等、協力しながら計画的に実施できた。 ・小学校に直接出向いて交流する機会を増やし、魅力を伝える努力を重ねた。小学校の校長先生から、年長組園児に小学校の様子を伝えていただく機会をもったり、年中組園児を対象とした体験授業を実施することができた。	A	B	・幼・小教員の連携を深める中で、園児の実態について相互理解や、内部進学にふさわしい園児の力を見極めに繋げることができた。3学期時点における年中組の内部進学希望率向上に、一定の成果が見られた。	・他校種と交流の機会や異学齢交流の時間を計画的に指導計画に取り入れ、学校への憧れの気持ちを醸成する。 ・年長組に加えて年中児・年少児の小学校への参観見学の機会を意図的に増やし、小学校との連携を深める。
		② 指導方法の工夫改善			A			
		③ 内部進学			B			
④ 家庭との連携		B						
(８) 特別支援教育	① 組織的な特別支援教育	②配慮が必要な園児の現状・指導方針について職員間で共通理解する。 ①個に応じた指導についての研修を行い、視覚教材の工夫等、一人ひとりの困り感に応じた指導の工夫に努める。	・小学校教員やスクールカウンセラーによる園児観察の機会を、定期的に設けるとともに、情報共有を図って園児のより良い発達に結び付けることができた。 ・教育委員会や地域の学校・関係機関等とも連携し、園児理解と保護者に寄り添う支援の在り方について研修を深めることができた。	B	B	・奈良幼の特別支援教育研修会に参加し、支援の在り方について学ぶことができた。 ・臨床心理士の先生による研修や、スクールカウンセラーからのフィードバックの機会を定期的に持ち、インクルーシブ教育の視点に基づく園児理解を進めることができた。 ・小学校と情報共有を行い、特別支援や合理的配慮についての連携を図ることができた。	・園外の研修会に積極的に参加し、ケースに応じた支援の在り方等について学び、効果的な指導ができるように研鑽を積む。 ・年齢にふさわしい発達かどうかの見極めなど、専門の先生からの助言も得ながら関係機関等と連携を取り、教育相談の効果的な活用を図る。 ・全園体制で子ども理解を進めて共通理解を図るとともに、職員のチームティーチングによって子ども個々へのきめ細やかな配慮と指導を行う。	
	② 配慮が必要な幼児の共通理解			A				
	③ 指導方法の工夫改善			A				
	④ 家庭との連携			B				
	⑤ 関係機関との連携			B				

学校自己評価書			奈良学園幼稚園										
大項目	中項目	小項目	具体的評価項目及び指標	取組と成果	評価	評価の観点・理由	課題及び改善方策						
Ⅱ 学 校 経 営 に 関 す る も の	(1) 組織運営	① 園長のリーダーシップ	②④所属長方針を示し、学年や分掌ごとの重点目標を明確にもつ。 ④⑤分掌や学年等の連携が行いやすいように情報共有を密にし、会議で熟議を重ねることで実践につなぐ。	・園経営目標実現に向け、子どもの育ちに寄り添い、より深く関わる中で、子ども一人一人の特性について理解を深め、方針に沿った実践を重ねることが出来た。 ・学年別に重点目標と具体的方策をもち、実践に取り組んだ。職員会議や日々の情報交換の場、園内研究会を通して、教員が共通理解しながら進めることができた。	A	A	・重点目標と具体的方策に基づき実践し、学期末に成果と改善点について振り返り、次学期の取り組みに生かすようにした。 ・校務分掌では、他校種との連携も図りながら、それぞれの行事や委員会を無事に進めることができた。 ・各分掌の連携に心を配り、職員との関わりを深めて信頼関係を築けるよう配慮した。	・年度当初から園運営の方向性を明示し、年間を通じ計画性をもって継続的に実践を重ねることを目指す。 ・園内研修等を通して、幼稚園全体で保育の質の高まりや共に学び高め合う教師集団を目指し取り組んでいく。 ・職員間の機能性を高める分掌配置や組織運営を行うとともに、互いの立場を理解し、切磋琢磨しながらさらに高め合える職員集団を目指す。					
		② 園経営目標・方針			A								
		③ 教職員の適正配置と運営への参加意識			A								
		④ 校務分掌等の連携			A								
		⑤ 会議の運営と位置づけ			B								
		⑥ 会議の結果			B								
		⑦ 職場の人間関係			B								
	(2) 研究・研修	① 研修の組織・計画・実施	②教育要領について、全体研修や個人研修を実施し、研究した内容を具体実践につなぐ。 ①②③教職員の研修体制の見直しと効果的な園内研修体制を構築する。 ④園外の研修への積極的な参加を推進する。	・年間を通じて保育研究に取り組み、互いの保育展開方法や指導の事例を持ち寄って研究を深めることができた。また、経験の浅い教員を中心とした、保育カンファレンスを日常的に行い、教育内容の充実と教職員一人ひとりの指導力向上に努めることができた。	A	B	・「元気なならっこ」約束運動等の取組を継続するとともに、教員個々の得意分野を生かした園行事の工夫等、実践を通した研修を進めたことは職員の資質向上に繋がった。 ・教職員が奈良県私学幼稚園連合会主催の研修会等に参加し、得た知見を報告し合うことで、研修を深める機会をもつことができた。	・研修については、見通しをもった計画を行い、様々な分野の講師を招聘し、研究の深化を図る。 ・教員の構成年齢が大きく変わったことから、チームティーチングをより一層推進し、園全体の教員の資質向上に力を注ぐ。 ・園内体制を整え、園外研修への積極的な参加を推進する。					
		② 園内研修			B								
		③ 保育研究			A								
		④ 園外の研修への参加			B								
		⑤ 研修成果の普及			B								
	(3) 安全管理	① 園安全計画の立案	①②③④危機管理マニュアルの工夫改善（アレルギー対応・熱中症マニュアルの改善等）を行い、研修・講習会の内容を構築する。	・危機管理マニュアルや園安全計画を作成し、全教職員が危機管理意識をもつようにした。 ・救命講習会に園教職員が参加し、安全意識の高揚に努めた。 ・幼小中高合同避難訓練を2回実施した。 ・警察署と連携し、交通安全教室を実施することができた。	A	A	・毎月「安全の日」を位置づけ全教職員で安全点検を行った。また、避難訓練だけでなく、防災頭巾の着用訓練などを実施し、防災意識の向上に努めた。 ・園の玄関にインターホンを設置し、日々玄関を施錠する等、日常的な安全管理に努めた。	・全教職員による毎月の「安全の日」の点検は、今後も継続して実施する。 ・合同避難訓練の他、園内避難訓練や防災の意識づけをする保育活動を定期的に行う。 ・警察署など関係機関と連携して、交通安全教室を実施する。 ・コールやお便り等を通じて、交通安全に対する意識づけについて、保護者に協力を促す。					
		② 園防災計画の立案			A								
		③ 危機管理体制の整備			A								
		④ 安全指導の工夫改善			B								
		⑤ 家庭との連携			A								
		⑥ 関係機関との連携			B								
	(4) 保健管理	① 保健計画の立案	①感染症防止対策を徹底した上で、園児の健康管理、体力の向上を図る計画の立案 ②教育相談体制の構築 ③県教育委員会の事業である「元気なならっこ約束運動」に取り組み、保護者とともに生活習慣の自立を促す。	・夏休み期間と1月に「元気なならっこ」約束運動に取り組んだ。 ・朝の挨拶当番が定着し、子どもたち自らが、大きな声で挨拶出来るようになった。 ・スクールカウンセラーの存在を保護者に周知し、気軽に育児の悩みなどの相談が受けられるような体制作りに努めた。教職員もフィードバックを受け、日頃の保育に活かすことができた。	B	A	・手洗いうがい、消毒の励行等、園児が自分でできることを習慣づけるとともに、保護者と連携を取り、個々に応じた対応を適切に行うことができた。 ・「元気なならっこ」約束運動に取り組むことで、生活習慣の自立につながった。 ・発達に課題を持つ幼児の保護者等が、気軽にカウンセラーに相談を受けることができるよう配慮し、教育相談に繋げることができた。	・約束運動などを活用し、園児が自らの力で継続して取り組めるよう、保護者に啓発していく。 ・熱中症対策やノロウイルス対策など、職員研修を継続的にを行い、体制を整える。 ・スクールカウンセラーの相談を活用できるよう、状況に応じて園が繋いでいくように努める。					
		② 心のケアや健康相談の体制の整備			A								
		③ 健康観察、健康管理能力の育成			A								
		④ 関係機関との連携			A								
		⑤ 学校給食の衛生管理			A								
	(5) 地域等との連携	① 園情報の発信	①園情報の積極的な発信（たより、ブログ、HPなど） ②園(保育)公開 ③勤労感謝の日ウィークを設ける ④園と保護者の連携の活性化(行事の企画及び協力と実施内容) ⑤幼小連携計画立案と実践の蓄積 ⑥預かり保育の円滑な運営 ⑥課外講座及びサッカースクールの充実	・HPの定期的な更新や園長ブログ、園・学級便り、また「ならがくようちえん日記」のHP掲載と玄関前掲示など、情報発信に努めた。 ・勤労感謝の日ウィークを設け学園内や近隣の商業施設へ感謝の気持ちを伝える活動が出来たことで、働く人たちへの感謝の気持ちが育っている ・幼小内部進学委員会を通して計画的に立案し、小学校教員による保育参加や園児の小学校での授業体験等、実践を重ねた。 ・預かり保育の指導計画を作成し、家庭的な雰囲気の中で、季節の制作を楽しんだり異年齢が交流したりしてゆったりとした時間を過ごすことができた。 ・サッカースクールは対象を年中児まで拡大し、課外講座については年少児が受講できる講座も増やすことで、保護者のニーズに応えることができた。	A	B	・保護者アンケートの「幼稚園は、子どもの様子について機会を捉えて伝えている」「ホームページやブログ、園便り等を通じて園の様子がよくわかる」の各項目で93%の肯定的評価を得た。とりわけ「ならがくようちえん日記」の取組に対して、高い評価を得ることができた。 ・勤労感謝の日ウィークを設け学園内や近隣の商業施設へ感謝の気持ちを伝える活動が出来たことで、働く人たちへの感謝の気持ちが育っている ・小学校授業体験等、園児が小学校に親しむ良い機会となった。 ・サッカースクールの対象者を年中組にまで拡大したこともあり、課外講座が充実したと、利用された多くの保護者から高い評価をいただくことができた。	・幼稚園教育の理解を促すような発信となるよう内容の工夫・改善を進める。 ・勤労感謝の日ウィークを設け学園内や近隣の商業施設へ感謝の気持ちを伝える活動は、来訪する度に温かい言葉をいただき、子ども達にとっても有意義な体験となっているため、継続していく。 ・小学校と共催のイベント等を通じて、地域と繋がる機会を増やすよう努める。 ・預かり保育については、通常保育の教員と報告・連携を密にし、園児が安心して過ごせるようにしていく。また、保護者への連絡事項も丁寧に行う。 ・サッカースクールや課外講座の更なる充実を図るとともに、保護者への周知を高めて活動の充実を図る。					
		② 園(保育)公開			B								
		③ 家庭・地域との連携			A								
		④ P T Aの活性化			B								
		⑤ 校種間連携			B								
		⑥ 課外講座等			A								
	(6) 施設・設備	① 教育環境の整備	①③整った教育環境の中で生活できるように、安全点検と日頃の整理・整頓に努める。	・毎月10日を安全点検の日とし、施設・設備の点検を行った。また日常的に、園舎内外・保育室の整理整頓に努めた。	A	A	・保護者アンケートにおいて、「幼稚園は、園内の環境整備や美化に努めている」の項目で100%の肯定的評価を得た。 ・園内環境の整備は、保育の原点と言えるものであり、日頃から丁寧な対応に努めてきた。	・教職員による月1回の安全点検を実施するとともに、保護者にも安全な環境整備の現状をわかりやすく伝える。					
		② 施設設備の有効利用			B								
		③ 施設設備の管理			A								
	(7) 情報管理	① 公文書の作成	②個人情報の保護に関する規定に沿った対応を遵守する	・USBや個人記録等の取り扱い等、各教職員に個人情報の取り扱いについて徹底できた。	A	A	・個人情報の重要性を周知してきたため、取り扱いに対する意識は高くなり、管理体制が明確になった。	・今後も個人情報に関わる研修を継続し、教職員一人一人が自覚と責任をもち、管理や取り扱いに十分注意するよう啓発を行う。					
		② 個人情報の管理・保護			A								
	(8) 園児募集・広報	① 広報活動の充実	①②見学会・説明会・体験会等の内容の充実、塾等との良好な関係と情報交換 ①②ホームページやSNSによる情報発信の充実	・保護者や塾関係者に本園の取り組みを理解してもらえよう、体験入園、説明会の充実を図るとともに、ホームページの充実やSNSによる情報発信などを行った。 ・2歳児保育（いちご組）の強化策として来年度から週5日実施とし、満3歳児入園制度も導入することとした。広報活動を通じて周知に努め、入会者募集に一定の成果が得られた。	B	B	・幼児教室等へ職員が直接出向き、渉外活動を積極的に行うとともに、2歳児保育の保育内容充実に努め、保育体験会や子育て支援講座の実施などを行ったが、入園者の獲得に結び付かなかった。 ・ホームページのブログの充実を図り、日頃の保育の様子を紹介して好評を得た。	・幼児教室や子育て支援センター・塾関係者などとの結びつきを深めるとともに、保護者のニーズを的確につかみ、より良い広報活動に努める。 ・2歳児満3歳児保育（いちご組）の充実を図り、広報も含めて良い口コミを増やす。 ・園長ブログや「ならがくようちえん日記」の充実を継続的行うとともに、Web広告を活用し、ホームページ閲覧回数の増加を推進する。					
		② 志願者数増の取組			B								